

自然博物館
ニュース

A·MUSEUM

vol.15



ア・ミュージアム

ミュージアムパーク

茨城県自然博物館



希少植物の宝庫 小貝川



上：ノウルシの群落 Euphorbia adenochlora
下：アマナ Tulipa edulis

辛夷の花も終わり、桜が満開になるころ、小貝川の河原では黒々と広がる野焼きの跡に、ノウルシが黄色いカーペットを敷きつめます。同じころクヌギ林の林縁には春植物のアマナが清楚な白い花を咲かせています。一昔前にはそれほど珍しくなかったこの里山の風景も、現在ではこの小貝川でしか見られないものとなりつつあります。小貝川には、この季節になるとヒメアマナやエキサイゼリ、ヒキノカサなど絶滅の心配される植物が次々と花を開かせます。

希少植物の宝庫といわれる小貝川ですが、かつてはこれらの植物のすみかである氾濫原はいたるところで見られました。しかし、ダムや護岸工事などの治水事業や開発の進む中、このような氾濫原は急速に失われつつあります。

そして、小貝川に多くの希少植物が残されてきた背景には、これらの植物のすみかを自然の移り変わりや開発の手から守る地元の有識者や植物研究者のグループによる地道な活動が続いていることを忘れることはできません。

(資料課：小幡和男)

朱鷺・今私たちが間われる時代—レッドリストの動物たち—
 第12回企画展 Message From Endangered Animals Diamond's Evil Quartet
 平成10年4月18日(土)～平成10年6月14日(日)



佐渡のニホントキ (©近辻宏帰氏)



多摩動物園で飼育繁殖されているコウノトリ (©東京都多摩動物園)

「レッドリスト」あるいは「レッドデータブック」という言葉を、どこかでお聞きになったことがあるのではないでしょうか。最近は各国での国内版や、さらに自治体レベルでの発刊が相次いでいますが、その原典は、国際自然保護連合(IUCN)が1966年に初めて刊行した「IUCN Red List of Threatened Animals」です。表紙・裏表紙ともに赤く塗られており、その中に記載された動物種の絶滅危機感を表しています。このリストは現在に至るまで数年おきに発行されており、野生動物の保全活動への基礎的なガイドラインとして大きな役割を担っています。

日本では環境庁が、国内版レッドリスト「日本の絶滅のおそれのある野生生物」を1991年に刊行しました。また最近では各都道府県レベルでも、それぞれの地域性にあわせたランクによるリストの策定が始まっています。茨城県でも環境政策課が、県内の絶滅危惧植物種についてまとめた「茨城における絶滅のおそれのある野生生物(植物)」を1997年に発行し、現在は動物種についてのリストの発行準備も進められています。

今回の企画展では、レッドリストに記載されている動物たちに焦点を当て、1)どのような理由で危機的な状況に陥ってしまったのか、2)またそうした事態に対しての保全戦略はどうなっているのか等についてを解説します。

米国の生態学者J. ダイヤモンド博士は、動物種が絶滅に至る過程を類型化し、「悪魔の四重奏」と名付けました。「過剰な殺戮」「生息地の破壊と分断」「帰化動物の衝撃」「絶滅の連鎖」がそれですが、企画展ではこれらの類型に基づき、いくつかの動物種についてはさらに詳しい事例の紹介をします。またレッドリスト動物保全への取り組みの紹介では、行政機関、民間団体(NGO)等の活動を紹介するブース展示コーナーを設けます。

私たちがこれからできることは何なのかについて、ぜひこの機会に考えていただければと思います。

(教育課: 山崎晃司)



日本固有種のニホンザリガニ



オオウラギンヒョウモン (©北九州自然史博物館)



オランダ・ライデン自然史博物館に収蔵されたニホンオオカミ



茨城県県北で産卵するアカウミガメ (©日立市かみね動物園)



ゼニタナゴ (©さいたま水族館)

●入館料	大人	710円 (570円)
	高校・大学生	430円 (290円)
	小・中学生	140円 (70円)
※ () 内は20名以上の団体料金		
※ この料金には、常設展・野外施設入場料が含まれています。		

研究ノート●筑波山及び周辺の自然（4）～霞ヶ浦の生いたち～



図1 古東京湾とバリアー島

周囲約150km、面積約170km²、琵琶湖について我が国第二位の広さを誇る「霞ヶ浦」。筑波山とともに茨城県の象徴である「霞ヶ浦」とその周辺の台地の生いたちを迎ってみましょう。なお、最終氷期以降は、井内・他(1993)『アーバンクボタ』No.32、霞ヶ浦、を参考資料としました。

1 古東京湾時代

(約40万～12万年前：霞ヶ浦周辺の台地をつくる地層の堆積期)

第四紀更新世（約2万～200万年前）の後期には、寒冷な氷期と温暖な間氷期が約10万年の周期で繰り返していたと考えられています。約40万～12万年前頃、関東平野一帯には古東京湾と呼ばれる内海が進入し、気候の変動にあわせて縮小拡大を繰り返していました。この海で堆積した厚い地層が、霞ヶ浦の「器」を形成しています。当時は鹿島灘から九十九里浜にかけて、図1の様な細長い小島が120



図2 北浦町の潮汐三角州堆積物の地層



図3 霞ヶ浦町のカキ化石床

kmにわたって存在したと考えられています。このような地形は、北米の大西洋沿岸や北海沿岸にもみられ、バリアー島と呼ばれています。当時、鹿嶋市付近にはバリアー島の切れ目で潮流口と呼ばれる外洋と内海を連絡する水路があり、その内側には図2のような潮汐流による三角州堆積物の地層が形成されました。また、図3のような潮間帯に生息していたカキ礁の化石等もみられ、砂浜海岸、湿地、潟等の様々な環境が広がっていましたようです。さらに、産出する貝、有孔虫、珪藻等の化石から、潮間帯から水深30m程度の浅海であったと推定されています。

2 鳥趾状三角州時代

(約8万年前：霞ヶ浦周辺の台地をつくる地層の堆積期)

次第に寒冷化が進み、海岸線が退き、蛇行河川が発達しました。氾濫原が広がり、河口付近には、ミシシッピー川河口に見られるような鳥趾状三角州が形成されました。この三角州は、砂礫質の堆積物で、図4のように筑波・稻敷台地、新治台地付近に分布しています。

3 最終氷期時代

(約2万年前：霞ヶ浦の器の掘削期)

さらに、寒冷化が進み最終氷期がピークに達した約2万年前には、海水面は現在より約70m程低下し、古東京湾時代に潟で泥質堆積物が堆積したところは、下刻作用を受けて谷を形成しました。砂質堆積物や鳥趾状三角州時代に砂礫質堆積物が堆積したところは、侵食を受けずに台地となりました。

4 繩文時代前期

(約6千年前：霞ヶ浦の誕生期)

やがて、温暖期に入り、侵食された谷に縄文の海が進入し、沖積層が堆積し始めました。ボーリングの資料から、当時の谷の面は霞ヶ浦の地下40～50mにあり、堆積の開始は約1万年前頃で、当初は河川や湿地であったことが分かっています。6千年前頃最も暖かくなり、図5のように縄文の海も最大に広がりました。

5 縄文時代後期～現在

(微化石と有機物から当時の環境が推定されています。)

- (1)縄文時代後期～古墳時代：寒冷期で閉鎖性が進みました。
- (2)奈良～鎌倉時代：温暖期で信太流海（しだのうみ）榎浦流海（えのきのうみ）と呼ばれる海が広がり、水深も深くなっています。『常陸國風土記』には、鯨はいなかったが、たくさんの海生魚類がいたとの記録もあります。
- (3)室町～江戸時代：15～16世紀頃に小氷期が始まり、海水の交換が悪化し、淡水化したとされています。
- (4)明治～現在：明治時代に小氷期は終了しましたが、湾口部の堆積物のため、多少の海水の流入はありました。昭和38年常陸利根川河口堰が完成し、淡水化は固定されました。

(資料課：菅谷政司)

鳥趾状三角州時代の霞ヶ浦周辺域の古地理
(10～8万年前)
〈岡崎・増田、1989.一部省略〉

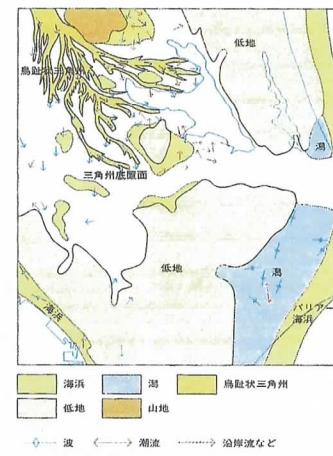


図4 古鬼怒川下流の鳥趾状三角州の分布



図5 縄文時代前期の海の分布

野外紹介●野外ガイドツアー

自然博物館の野外施設は、四季を通じてさまざまな特徴があり、見学に訪れた人たちからも大変好評を得ています。その理由としては、そこで見られる植物の姿や昆虫・鳥といった動物の生活の様子、岩石や貝の化石など豊かな自然が観察できるようになっているからです。

来館者は、野外施設を自由に散策したり、野外セルフガイドをもとにコースを回ったりと利用の仕方はさまざまですが、野外では、博物館職員といっしょに観察を楽しむこともできます。それが、野外ガイドツアーです。

野外ガイドツアーは、みなさんにいろいろな自然を知ってもらうためのきっかけとなるよう、自然の様子や仕組みについての観察や実習など博物館職員が毎日交代で自分の専門的分野にあわせてテーマを決め実施しています。

ここでは、その観察の様子・ポイントなどを紹介しましょう。



アミガサタケ



「菅生沼の野鳥を観察しよう」

どんな鳥が観察できるのでしょうか。コハクチョウが見えたかな？菅生沼は大型の水鳥であるコハクチョウが多数越冬できる全国でも数少ない場所とされ、野鳥の愛好家の方々からもいろいろと問い合わせがあります。

菅生沼には、えさとなるマコモなどの水生

植物が豊富にあり、水面も厚い氷におおわれないなどコハクチョウが越冬できる条件が整っています。

コハクチョウは、日本には冬鳥として渡来し、越冬地では家族単位で群で生活し、春になるとユーラシア大陸の北極海沿岸の繁殖地へ戻ってしまうなど、野鳥の色や形、生活する環境や季節などちょっと調べておくと観察しやすくなります。季節も刻々と変わります。これからは、どんな野鳥が観察できるのでしょうか。



菅生沼の野鳥の観察風景

「キノコを観察しよう」

キノコというと秋のキノコ狩りを思い出しますが、実は一年中、観察することができます。観察のポイントは、樹木の近く、落ち葉や朽ち木の上、林の縁や草むらなどを見てみることです。写真のアミガサタケは、林の縁で4月～5月ごろ見ることができます。自然博物館の野外では、どんなキノコを探すことができるでしょう。いっしょに探して見ませんか。

「貝化石を探そう」

化石や岩石は季節で変わるものではありませんが、すばらしい発見をさせてくれるものです。それは、過去の地球の変化、ようすを私たちに教えてくれるもので。過去の地球では、どんなことが起こっていたのでしょうか。現在と結びつけながら説明を聞き観察すると新しい発見に出会えると思います。



13万年前の貝化石堀体験

以上、他にもいろいろなテーマで観察していますが、野外ガイドツアーの一番の特徴は、そのテーマを中心にみなさんと直接話をしながら観察や実習を進めていくところにあると思います。ですから疑問が起きたらすぐに聞くことができます。さあ、今日はどんな発見ができるのでしょうか。

野外ガイドツアーは毎日午後1:30～2:30（約1時間）に行われています。詳しくは、当日、自然発見工房にておたずね下さい。

（教育課：櫻井稔郎）

歳時記●暖冬とサクラの開花



満開のサクラ

今年は年明け早々、関東地方に2回も大雪が降りました。関東地方に大雪をもたらしたのは、いずれも東シナ海から発達しながら日本の南岸沿いを進んだ低気圧でした。平年ですと、関東地方に雪が降るのは、2月、3月が多いのですが、なぜ今年は1月に2回も続けて降ったのでしょうか。

冬、東シナ海から進んでくる低気圧は、シベリア高気圧の南のへりに沿って進ることができます。シベリア高気圧の勢力が強い場合、低気圧は日本列島から離れてずっと

と南を通ることになります。ところが、今年のようにシベリア高気圧の勢力がそれほど強くない場合は、低気圧が八丈島付近を通るくらいまで関東地方の南岸に近づくことになります。しかも、その低気圧は、東シナ海から発達しながら進んできたことで、関東各地に大雪警報が出されるほど積雪になったのです。

日本付近が暖冬傾向になったのは、エルニーニョ現象の影響らしいのですが、エルニーニョ現象が起こると、なぜ暖冬になるのか、そのメカニズムはまだ解明されていません。暖冬だった年を、時間をさかのぼって調べてみるとエルニーニョ現象が起こっていた、ということだそうです。

さて、3月3日に、気象庁から1回目のサクラの開花予想日が出されました。水戸市の開花予想日は4月2日で、平年より4日早いそうです。これも、暖冬だ

ったことが影響するのでしょうか。数年前までは、ソメイヨシノという種類のサクラのつぼみを採取し、その重さを計り、つぼみのふくらむ状態を調べて、サクラの開花日を予想していました。水戸市の場合も、県庁内にある標準木のつぼみから開花日を予想していましたが、最近はサクラのつぼみは使わず、気温のデータから予想しているそうです。

博物館の野外「花の谷」には桜並木があります。サクラの満開は、開花から1週間位後と言われておりますので、開花予想日から1週間位後に、お花見にご来館されてはいかがでしょうか。

(資料課：根本茂)



博物館 花の谷

収蔵品紹介●日本産カブトエビ 節足動物門 甲殻綱 背甲目 カブトエビ科

5~6月の田植えがすんだ田んぼで、形や色がオタマジャクシに似た生き物が這いつ回っているのが見られることがあります。英語名でtadpole shrimp(オタマジャクシエビ)と呼ばれている「カブトエビ」です。カブトエビ類(*Triops* spp.)は甲殻類の中でも原始的な形態をもっており、古生代末期(約3億年前)からその姿をほとんど変えずに生きてきたので、「生きた化石」とも呼ばれています。



上：秋田正人氏より寄贈された日本産カブトエビの液浸標本
左よりヨーロッパカブトエビ（雌）、アメリカカブトエビ（雌）、アジアカブトエビの雌と雄。

下：アジアカブトエビ（雄）の標本

全世界でアメリカカブトエビ(*T. longicaudatus*)、アジアカブトエビ(*T. granarius*)、ヨーロッパカブトエビ(*T. cancriformis*)、オーストラリアカブトエビ(*T. australiensis*)の4種が知られており、そのうち日本には前者3種が生息しています。アメリカカブトエビとアジアカブトエビは関東から九州にかけて分布していますが、後者の分布域は比較的限定されています。また、ヨーロッパカブトエビは山形県のみで報告されており、最初に発見された酒田市の生息地は、日本産カブトエビの北限分布地として県の天然記念物に指定されています。今回紹介する収蔵品は、カブトエビの研究者である秋田正人氏から寄贈されたもので、学術的にたいへん貴重なものです。アメリカカブトエビは長野県松本市、アジアカブトエビは静岡県沼津市、ヨーロッパカブトエビは山形県酒田市で、各々1968年に秋田氏によって採集されたものです。

みで報告されており、最初に発見された酒田市の生息地は、日本産カブトエビの北限分布地として県の天然記念物に指定されています。今回紹介する収蔵品は、カブトエビの研究者である秋田正人氏から寄贈されたもので、学術的にたいへん貴重なものです。アメリカカブトエビは長野県松本市、アジアカブトエビは静岡県沼津市、ヨーロッパカブトエビは山形県酒田市で、各々1968年に秋田氏によって採集されたものです。

日本産カブトエビ3種の中で、雌



アメリカカブトエビ（雌）

雄が存在し、有性生殖するのはアジアカブトエビのみで、他の2種は雌と雌雄同体の個体しか確認されていません。

産み落とされた卵は、乾燥や高温でも強い耐久卵で、様々な化学物質にも抵抗性があることが明らかになっています。カブトエビ類は、孵化後わずか1ヶ月ほどの間に脱皮・交尾・産卵をさせ、卵を残して死滅します。田んぼの水底の泥土をかき回して雑草の幼芽を浮き上がらせたり、幼芽を食べたりして雑草防除の働きをするため、日本では「田の草取り虫」と呼ばれ、農家の間で親しまれてきました。近年、除草剤に代わるものとしてカブトエビ類を利用する試みも行われています。

(資料課：池澤広美)

妖精たちのすむ森から 春、そして夏へ向けて

茨城県自然博物館では、毎年1回、海外の自然を紹介する企画展を開催していますが、その準備のため、海外調査を実施しています。今回の特別企画展は、今夏開催予定の企画展に向けてのコスタリカ現地調査と、昨年夏開催した「アマルガサウルスの棘突起はなぜ長い」展のアルゼンチン現地調査の様子を写真を中心に展示しています。いわば企画展開催までの舞台裏を皆さんに紹介しようというものです。

ジャングルの中で調査隊員たちが、妖精たちと出会った感動と一緒に味わって頂ければ幸いです。



熱帯雨林の相観 エアリ
アル・トラム（空中ゴン
ドラから撮影）



アルゼンチン調査 パタゴニアの化石発掘の現場



コスタリカ調査 ラ・セルバの熱帯雨林

【予告】

98年夏 茨城県自然博物館に再びコスタリカの風が吹く！

海外協力企画展

妖精たちのすむ森から—コスタリカの生物多様性とその保護— 開催

中米の楽園ともいわれるコスタリカは、面積が日本のわずか1/7しかない小さな国です。しかし、そこには約850種の鳥類（日本は約550種）、熱帯雨林を始めとする様々な環境に多様な生き物たちが見られます。さらに、その自然を国全体で保護しており、国立公園や自然保護区などの面積は国土の27%に及びます。

そこで、コスタリカの多様な自然や自然保護への取り組みを紹介し、森の重要性や森を守るために私たちが何をなすべきか考える機会を提供したいと思います。

（教育課：栗栖宣博）



アカメアマガエル 展示室で名前を募集中



生物目録作りの前線基地 ビニル袋の中でガの幼虫を飼育している

コラム by director NAKAGAWA ◎ネイチャーゲーム

最近、ネイチャーゲームという言葉をあちこちで聞くようになりました。これはネイチャー（自然）をゲームのように楽しみながら体験し、体と心で自然を学んで行こうとする世界的な運動です。創始者はアメリカのナチュラリスト、J·B·コーネルさんですが（1975），日本では「日本ネイチャーゲーム協会」が1986年以降運動をつづけ昨年（1997）文部省認可の社団法人（代表・降旗信一）になっています。

当館のように野外施設をもっている所では、このゲームは実に幅広く展開でき、親子でもグループでも参加できますので、ひとつの目玉メニューになるだろうと思われます。当館にはすでに協会認可の「ネイチャーゲーム・インストラクター」も数名おり、野外活動の際にとり入れています。自然がどんどん遠くなる現代、このユニークな自然理解運動は益々重要な意味を持つことでしょう。



トピックス●（12月～2月）

トピックスコーナーが

オープンしました！

平成10年1月、第2展示室と第3展示室の間に、トピックスコーナーを新設しました。このコーナーでは、当館で購入した資料や、県内外の方から提供いただいた貴重な資料の中から、特に話題性のあるものを展示、紹介します。いろんな資料が登場する予定です。見逃さずにぜひご覧になってください。



自然教室－冬の鳥たち－ 1月10日（土）

大雪直後の1月10日、野鳥を観察する自然教室を開催しました。参加者は22名で、講師には中村栄先生（菅生沼に親しむ会）をお迎えし、雪に覆われた菅生沼で観察を行いました。菅生沼に架かるふれあい橋から、毎年飛来するコハクチョウをはじめ、カワウ、タシギ、カワセミやノスリなどを観察することができました。雪の中で活動する鳥たちは、普段にも増して一段と美しく見えました。



自然講座－里山の生き物たち－ 2月8日（日）

生き物たちに多様な空間を提供すると同時に、身近な自然である里山の、これからの方について考え、意見の交換を行う自然講座を開催しました。パネリストとして福岡県農業大学講師・宇根豊氏、自然史ライターのケビン・ショート氏、文化庁記念物調査官・池田啓氏をお迎えしました。参加者は260名を数えました。各氏から、里山は、農業によって生産され守られている自然であること、人と自然の微妙なバランスによって成り立っていること、また里山は人間がつくり出した環境であることから、放置して本当の自然に戻すのも一つの方法ではないかなどの意見が出されました。



第1回「課題植物」押し花絵コンクール結果発表

今年度の作品コンクールは、従来とは形を変えて第1回「課題植物」押し花絵コンクールとして実施しました。これは、出品していただく作品の材料を、人里でごく普通に見られる植物10種に限定するというものです。その趣旨は、身近な植物を材料に用いることによって、私たちの身の回りの自然に目を向けていくということであり、ここでは絶滅が心配されるような植物が材料に使われるることは絶対にないのです。

急な変更で製作時間がほとんどなかったのにもかかわらず、24点の作品が集まりました。材料となる植物の種類が限られているため、華やかな作品はないのですが、素朴でよく工夫された作品が多かったように思います。厳正な審査の結果以下の方々が入賞されました。（以下敬称略）

館長賞 花形美恵子 「お山の広場で食事会」

副館長賞 白井 峰子 「花火」

副館長賞 塚越 松江 「「チュ チュ」お花みつけた！」

優秀賞 石井 久衣 「つくば慕情」

優秀賞 花形美恵子 「よそおい」

優秀賞 鈴木 絹江 「花かご」

このコンクールは、来年度も実施する予定ですので、どうぞ奮ってご参加下さい。

なお、同時に展示された〈押し葉のしおりの部〉は、従来どおり11月のサンデーサイエンスの参加者が作成された作品です。こちらの入賞者は以下のとおりです。

未就学児の部 檻 倫佳 伊藤八重 三原かける 後藤武晃

低学年の部 島 達巳 菊地かずま 栗山尚美 長妻聖明 持木絢香

中学年の部 内手 彩 岡部健太郎 須之内朋子 葛谷由布子

高学年の部 鎌武恵美 山崎隆志 赤津成美

中学生の部 古谷友美

一般の部 菖塚昭子 福田和子 後藤武志 新村洋子 菖塚孔一



館長賞 花形美恵子さんの作品

観察の記録

ひだまりに、小さな紫色の星のようなオオイヌノフグリが咲く季節になりました。体長1㌢程のヒラタアブのなかまは、その花のひとつひとつに、まるで



ホソヒラタアブ

挨拶でもするように訪花します。花のすぐ前でしばらくホバリングしてから花にとまって蜜をなめ、あっという間に次の花に移ります。

早春から晩秋までよく見かけるヒラタアブのなかまには数種ありますが、ホソヒラタアブもそのひとつです。去年、博物館本館からセミナーハウスに至る通路に赤、白、ピンクのベコニアのフラワーポットがありました。9月から11月までの3ヶ月間、どの色の花に最も多く訪れるかを調べたら、白、赤、ピンクの順になりました。活動する時間は、光の強さや温度と関係がありそうです。

9月29日（快晴）の結果を代表的な例としてあげてみます。数字は訪花したアブの数です。

資料課：鈴木成美

色／時間	8:30	9:40	11:00	13:00	14:00	16:00
赤	1	2	0	0	0	0
白	2	3	0	1	0	1
ピンク	0	0	0	0	0	0

山崎由美子

インフォメーション(4~6月の行事)

自然教室

- 4月11日(土)10:00~(定員40名)
 『菅生沼の魚たち』
 5月9日(土)10:00~(定員40名)
 『草花で遊ぼう』
 6月27日(土)10:00~(定員40名)
 『アンモナイトの内部を見てみよう』
 [小学生以上が対象です]

自然講座(定員40名)

連続ワークショップ

- 『みんなで考えよう / 動物たちの21世紀』
 第1回 5月10日(日)10:00~
 第2回 5月31日(日)10:00~
 第3回 6月7日(日)10:00~
 [小・中学生が対象です]

自然観察会(定員40名)

- 4月26日(日)
 『春植物の観察』(筑波山)
 [小学生以上が対象です]
 5月24日(日)
 『日立周辺の自然と岩石』
 [小学4年生以上が対象です]
 6月28日(日)
 『菅生沼の水生動物を調べてみよう』
 [小学生以上が対象です]
 [観察会等への申込方法]
 2週間前までに電話で申し込んで下さい。なお、希望者多数の場合は、抽選を行います(講座は先着順)。
 ミュージアムパーク 茨城県自然博物館
 TEL 0297-38-2000

サンデー・サイエンス【楽しい体験教室】

月ごとにいろいろなテーマで、毎週日曜日にディスカバリー・プレイス内のスタジールームで実施しています。

観察や実験、工作などの体験をとおして、楽しみながら自然への関心を深める機会です。

テーマ

- 4月『化石のレプリカをつくろう』
 5月『花のつくりを調べてみよう』
 6月『昆虫の切り絵で下じきを作ろう』

時間 午前の部 10:30~12:00

午後の部 14:00~15:30

受付 開始時間の1時間前から、スタジールーム前で受け付けます。希望者多数の場合は抽選を行います。

えいが会(定員約300名)[映像ホール]

- 4月19日(日)『キタキツネ物語』
 5月17日(日)『平成狸合戦ぽんぽこ』
 6月21日(日)『ふしぎの国のアリス』
 上映時間 14:00~ 入場無料

自然なんでも相談

- 相談日 4月12日(日)
 5月10日(日)
 場所 ディスカバリー・プレイス観察カウンター
 時間 14:00~16:00

その他のイベント

- 4月29日(水) サイエンスデー(生物・科学の日)
 6月5日(金) サイエンスデー(地球・科学の日)

自然についてわからないこと、ふしぎだな、と思っていることなど、なんでも気軽にご相談ください。
 相談方法 博物館あてに質問を郵送するか、直接ご来館ください。

4月						
日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

5月						
日	月	火	水	木	金	土
			1	2		
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

6月						
日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

■は休館日です。

[交通案内]



- 常磐自動車道谷和原ICから20分。
- JR柏駅で東武野田線乗り換え、東武野田線愛宕駅～茨城急行バス「岩井車庫行き」又は「岩井西校行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分。



ご利用案内

[入館料]

区分	本館・野外施設	野外施設のみ
大人	510円 (410円)	200円 (100円)
高校・大学生	310円 (200円)	100円 (50円)
小・中学生	100円 (50円)	50円 (30円)

(注) () 内は団体料金 (20人以上)

企画展開催期間中については別料金となります。

つぎの日の入館料は無料です。

- 3月21日(春分の日)
- 4月29日(みどりの日)
- 6月5日(環境の日)
- 11月13日(茨城県民の日)
- 高校生以下の児童・生徒は、毎月第2・第4土曜日は入館無料です。(但し、春・夏・冬休み期間を除く)

[開館時間]

午前9時30分から午後5時まで(入館は午後4時30分まで)

[休館日]

- 毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)
- 年末年始

に会うことはほとんどありません。でも、私たちの身近に、確かに動物たちは暮らしていることをあらためて感じました。
 (S・O)

[編集後記]

1月8日から9日にかけて降った雪は、博物館開館以来の大雪となり、野外を真っ白に染めました。雪は深いところで30

cm位積もったでしょうか。レストラン前の花木広場から野鳥の森に向かって、雪の上にノウサギやキツネなどの足跡がはっきりと残っていました。普段彼ら